

「不周山」試論(前)

——魯迅『故事新編』世界の——

松岡 俊裕

キーワード：不周山 補天 故事新編 魯迅 歴史小説 国故整理 国粹保存
秋瑾 郭沫若 フロイト

文学者、思想家としての竹内好の、魯迅の歴史小説集『故事新編』に関する最初の直感的発言¹の真意についての推察は大変興味深いですが、それは魯迅理解というより竹内理解においてより意義深い発言であるので、ひとまずここでは触れないでおくことにする。

優れた日本の魯迅研究者として知られる木山英雄氏は、『故事新編』（計8篇）の第一篇「不周山」¹（1922年11月作。後に「補天」に改名²）の執筆について、「いきなり創世神話に取材した『補天』」の試みは、その趣意や作風に『野草』の一部に通じるものがあるとはいえ、なおしばらくは孤立した位置にとどまることになった」といい、また「古代もののほうは、当初の目論見のあらましも、その中断の本当のいわれも我々には不明なまま、『呐喊』の末尾に特異な作風の一端を留めることになったのであった」とも言っている³。だが本当に木山氏の言うように「いきなり」なのか、「当初の目論見のあらましも、その中断の本当のいわれも我々には不明なまま」なのかどうか。木山氏の発言には検討の要があるように思う。

本論は、筆者の“魯迅の歴史小説集『故事新編』に関する総合的研究——もう一つの「国故整理」——”の第一篇である。

1. 執筆の経緯

魯迅自身の『故事新編』所収諸作品の執筆の経緯、特に第一作「不周山」執筆の契機についての発言は以下の通り。

[だが]実のところ、私は当時“文学革命”に対して、それほど熱情は抱

いていなかった。[略]思い出してみると、大半は寧ろ熱情を持った者たちへの同感のためであった。こうした戦士たちは、思うに、[私は]“寂寞”の中にいるけれども、[彼らの]考えは正しいのだから、少しばかり大声を挙げて加勢してあげよう⁴。初めは、本当にそれが目的であった。もちろん、その中には、旧社会の病根を暴露して、人々に留意して貰い、手立てを講じて治療を加えたいという希望が些かなりとも混じっていたに違いない。ただ、この希望を実現するためには、どうしても先駆者と同じ歩調を取らなければならならなかった。私はそこで、作品に比較的明るい色が目立つようにと、黒暗部分を少し削って、歓喜の表情を装った。それが後に一冊にまとめられて『呐喊』となったもので、全部で14篇ある。[略]北京を逃げ出して、廈門に隠れ住み、大樓の階上で『故事新編』を数篇と『朝花夕拾』を10篇書いただけである。前者は神話、伝説及び史実を脚色したものであり、後者は回想の記事にすぎない」（『南腔北調集』所収「『自選集』自序」[1932年12月14日作]）

[例えば]私が書いた「不周山」は、最初の考えでは性の発動と創造、並びに衰亡を描写する予定であった[が]」（『南腔北調集』所収「我怎麼做起小説来」[1933年3月5日作]）

第一篇の「補天」——原題は「不周山」——は、随分昔の1922年冬に書き上げたものである。その時の考えでは、古代と現代のいずれからも題材を取って短編小説を書くつもりであった。「不周山」は、“女媧、石を煉って補天を補う”という神話に取材して試作した第一篇である。最初は実に真面目であった、まあフロイト[「弗羅特」]説に基づいて、創造——人と文学の——の縁起を説明しようとしたにすぎないのだけれども（1935年12月26日作「『故事新編』序言」）

以上は、魯迅自身の発言であるが、必ずしも読み手に発言の意図が明確に伝わってこない。

先ず(前)で魯迅に「不周山」執筆を促したと考えられる幾つかの要因について、筆者の推測を加えながら説明をし、ついで(後)で作品の内容を分析し、更に何点かの疑問について検討を加えることにする。

ア. 小説創作のお手本——“歴史的小説”

魯迅の最初の歴史小説は、日本留学時代に書いた「スパルタ[「斯巴達」]の魂」(1903年作)である。この翻案作品は“歴史的小説”というより“歴史小説”

であり、魯迅自身の言葉を借りて言えば、「古人から一層生気を失わせるような書き方」（「『故事新編』序言」）をしている作品ということになる。ただ内容の点から言うと、夫の生還を死を以て諫めた妻セイレーン（原文「淡烈娜」。「淡烈娜」は、つとに拙論「魯迅——『自題小像』詩成立考」の注で指摘したように、月界の女神名セレーヌではなく冥界の女神名セイレーンであろう）を顕彰したのは、「不周山」の女媧の奮闘を顕彰したのに通ずるものがあると言える。

魯迅にとって、こうした小説創作の目的は、東欧弱小諸民族等の文学の中国への紹介同様、中国人の劣った国民性の改造にあった。魯迅が青年時代に最初に小説などの文学によって中国人の国民性の改造を目指した際、魯迅が将来書こうと頭に思い描いていた小説には無論中国を舞台にした小説が含まれていたであろうし、またその中国を舞台にした小説の中には当然歴史小説が含まれていたに違いない。

文学革命（1917年）後に魯迅が歴史物の執筆への意欲に言及した喩矢は、管見の限りでは「『三浦右衛門の最後』記者付記」（1921年6月30日作。7月1日『新青年』9巻第3号所載。『魯迅訳文集』第1巻付録）である。「三浦右衛門の最後」の原作は、菊池寛の歴史短編小説「三浦右衛門の最後」。「魯迅は『記者付記』の中で、この小説が日本の武士道精神[の本質]を暴露し諷刺しているのを賞賛するとともに、中国に封建“名教”[儒教道徳のこと]を糾弾する作品がまだ欠けているのを慨嘆した」（人民文学出版社『魯迅年譜（増訂本）』）。「記者付記」に言う、

菊池氏の創作は、できる限り人間性の真実を掘り起こそうとしている。しかし、ひとたび真実を得るや、彼は憮然として嘆き悲しんだ。だから彼の思想は厭世に近い。だが一方でいつも遙か遠い黎明を凝視している。それゆえ、また奮闘者でもある。[略]日本に於ける武士道の力が、我が国に於ける“名教”の力に勝っているのは、ただ競って人間性を取り戻そうとしているためであり、そこで、この一篇で断固として刑罰を加えたのだ。このことから作者の勇猛さが見てとれる。だが彼ら古代の武士は、まず自分の生命を軽視し、その上で他人の生命も軽視するのであって、自分の命を惜しんで他人を殺す人々とは、確かに幾らか違いがある。しかるに我々の殺人者、例えば張献忠[明末に李自成と対立した反乱軍の首領]は気儘に人を殺したが、ひとたび満州人の一箭に遭うや、なんといばらの中に潜り込んだ。これはなぜなのか？ 楊太真[楊貴妃]が遭遇したのは、この右衛門が遭遇したのとほぼ同じだが、当時から今に至るまで、このことに関する著作は多いものの、この一篇に似た含意は見られない。これは一体なぜなのか？

私も真実を発掘したいと願うのだが、黎明が見えないため、茫然たらざるをえない。この点で作者に心からの賞賛を送る次第である。

文中の後半に見える、楊貴妃は何故玄宗に殺されたか、というテーマについて、魯迅は3年後の1924年に西北大学の招きに応じて西安に中国小説史の講義(「中国小説的歴史的変遷」)をしに赴いているが、このテーマ関連の資料集めもその目的の一つであったという⁵。

1921、2年当時魯迅は、日本の歴史小説家の中では、森鷗外、菊池寛、芥川龍之介の三人に関心を持っており、菊池の「三浦右衛門の最後」、「復仇の話」(「復仇的話」)と芥川の「鼻」(「鼻子」)、「羅生門」を訳している(森の歴史物は訳していない)。

歴史小説の書き方については、魯迅は菊池寛から以外に芥川龍之介からもヒントを得たようである。「『鼻子』訳者付記」(1921年4月30日作)に言う、

田中純は彼を評して「芥川君の作品には、作者の性格の全体を以て、材料を支配し切つて居る様子が見える。此の事実は、此の作品が常に完成して居ると云ふ感じを、吾々に起させる」⁶と言っている。彼の作品が用いている主題で最も多いのは、希望がすでに達成された後の不安か、正に不安にかられている時の心情であり、本篇は格好の見本と言える。

芥川氏に不満なのは、おおよそ次の二点のためである。一つは古い材料を多用し、時に物語の翻訳に近いこと、一つはベテランの手馴れた感じが濃すぎるので、読者に嫌がられやすいことである。その意味でも本篇は格好の見本と言える。

また「『羅生門』訳者付記」(1921年6月8日作)に言う、

この歴史的小説(決して歴史小説ではない)も彼の佳作と言え、昔の事実に取材して新しい生命を注ぎ込んでいるので、現代人と関係が生ずるのである。

更に魯迅周作人共訳の「『現代日本小説集』(1923年。上海商務印書館)附録「關於作者的説明・芥川龍之介」に次のように言う。

田中純は彼を評して「芥川君の作品には、作者の性格の全体を以て、材料を支配し切つて居る様子が見える。此の事実は、此の作品が常に完成して居ると云ふ感じを、吾々に起させる」⁷と言っている。彼の作品が用いている主題で最も多いのは、希望がすでに達成された後の不安か、正に不安にかられている時の心情である。彼はまた古い材料を多用し、時に物語の翻訳に近い。だが、彼が昔の事を自分の言葉でまとめるのは、決して単に好奇のためだけでなく、彼なりのより深い根拠があるのである。彼はそうした材料に含まれている昔の人々の生活の中から、自己の心情にぴったり合って、感動させてくる何かを探し出そうとする。それ故、ああした昔

の物語はどれも彼が書き改めると、新しい生命が注ぎ込まれて、現代人と関係が生ずるのである。

ところで三人のうち森鷗外が「不周山」執筆の4ヶ月ほど前の1922年7月9日に亡くなっている。周作人は「森鷗外博士」(1922年7月24日作。周作人『談龍集』所収)を書いてその死を悼んでいるが、魯迅は特に追悼文を残していない。魯迅が森の歴史物を訳していないのは、晩年の「洪江抽斎」等の一連の史談物に不満を覚えたからなのだろうか。彼の好みとしては中期の「山椒太夫」等の“歴史的小説”により興味があつたのではなかろうかと推察できるけれども、そのことへの言及は何故か全くない。

イ. 茅盾からの小説執筆依頼と魯迅の当時の小説創作

1922年6月6日、文学研究会同人の茅盾は周作人に手紙を出し、魯迅に該研究会の機関誌的存在たる『小説月報』のために小説の寄稿を依頼。手紙の内容は以下の通り、

魯迅先生に創作[文芸作品。ここは小説のことをいう]がございましたら、お送り下されたくお願い申し上げます。『月報』は創作が最も欠けており、部外者が月報に対して抱く一番大きな不満も、創作の掲載が少ないことです。実際私たちは数多く掲載するのを望まないというわけではありません。ただ好いものが少ないだけのことであり、仕方ありません。それで魯迅先生に月報のために一篇書いて下されたくお願い申し上げる次第です。

魯迅が「古代と現代のいずれからも題材を取って短編小説を書くつもり」(「『故事新編』序言」)になった、最初の契機となったのは、この茅盾からの『小説月報』への小説執筆への依頼であったか。既述したように、歴史物の執筆については、すでに考えていたと思われる魯迅であったが、茅盾からの執筆依頼を契機に真剣に取り組むことになったものと思われる。

恐らく茅盾からの執筆依頼のあつた直前か直後のことであろう、魯迅は「白光」を書く(1922年6月作。同年7月10日発行『東方雑誌』第19巻第13号掲載)。これは『呐喊』物の続きであり(没落知識人を描いた「孔乙己」と同工異曲で、科挙制度を批判したもの)、魯迅は代わり映えのしない作品に自己の能力の限界を覚えたか。

茅盾の依頼に答えて、魯迅が最初にしたのは現代物「端午節」である。これは当時の北洋軍閥政治の腐敗と経済的窮乏振りを描いたもので、9月10日発行の『小説月報』第13巻第9号に掲載された。

続いて魯迅は、「兔和猫」を執筆(1922年10月10日発行『晨报副鵒』に掲載)。これも現代物で、強者への憎しみと反抗を表明したもの。

「鴨的喜劇」(1922年10月作。11月29日発行上海『民国日報』副刊『婦女評論』)。これも現代物で、「エロシエンコ[「愛羅先珂」]の生命と自由を熱愛する気概と、北京の沙漠のような寂しい情景とを対比させて、作者の現実に対する憎悪をそれとなく表現した」(人民文学出版社版『魯迅年譜(増訂本)』)。

「社戯」(1922年10月作。12月10日発行『小説月報』第13巻第12号)の記述は、現代から少年時代に戻り、「現在の北京の劇場内の汚濁した空気」と「少年時代の社戯の麗しい世界」とが見事に対比されて描かれている。この作品は現代物と歴史物との橋渡しの役割を持つのであろうか。後の回憶体小品集『朝花夕拾』の作品群に繋がる作品と見られる。

以上は、のち全て『呐喊』に収められる。

歴史物の第一作が、この「不周山」である(1922年11月24日に原稿を孫伏園に渡す)。

「不周山」執筆直後の1922年12月3日に『呐喊』「自序」が書かれており(発表は、1923年8月21日発行『晨报』の付録『文学旬刊』)、従って「不周山」は『呐喊』最後の作品ということになる。「不周山」を以て『呐喊』の世界を締め括ったのは、「不周山」(及び「社戯」も)がそれまでの『呐喊』作品とはやや異質な性格を帯びていることに直感的に気づいていたからかも知れない。

ウ. 胡適の“国故整理”に反対する

魯迅の歴史小説への関心の背景には、胡適流の“国故整理”への反発、“国粹保存派”たる『学衡』派と鴛鴦胡蝶派への批判があった。先ず本項に於て胡適の“国故整理”とそれに対する魯迅の態度について見てみる。⁸

“国故整理”の問題を最初に提示したのは新潮社の毛子水で、彼は「国故和科学的精神」(『新潮』第1巻第5号[1919年5月1日発行])と「駁『新潮』「国故与科学的精神」篇」訂誤」(『新潮』第2巻第1号[1919年10月発行])に於て、“国故”を「中国古代[中国語。中国語の「古代」は古代から清末までをいう]の學術思想」と「中国民族の過去の歴史」と定義し、「科学的精神を具有している人」が“国故”を整理すべきであるとした。毛子水のこの主張は、当時の“国粹”派の“保存国粹”という観点とは明らかに異なる。前者の付記で傅斯年も毛子水の考えに賛意を表明した。これに対して、胡適も後者に付された毛子水への手紙の中で、「我々は“国故家”が科学的研究法を用いて国故の研究を行なうのを全力で指導すべきであって、先に“有用無用”の先入観を抱くことによって、多くの無意味な意見を生み出してはなりません。君はどう思いますか？ もう一つの考えについては、君は充分表明し切っていませんね。清朝の“漢学家”が国故学の大発明をなすことができたのは、正に彼らが用い

た方法がどれも偶然科学的方法に合致していたからなのです」と述べた。

ところで、この間に「問題と主義」論争が興った。先ず胡適が「多研究些問題、少談些主義」（『每週評論』第31期、1919年7月20日発行）で、「主義を語る」ことは「役に立たず」「危険である」とし、これに対し知非（藍志先）が「問題と主義」（『每週評論』第33号[1919年8月3日発行]）で「胡適の見解に反対し、反駁を加え」、更に守常（李大釗）も「再論問題と主義」（『每週評論』第35号[1919年8月17日発行]）で「胡適の見解に反対し、胡適の文章に対して自己の考えを語った」。これらに対して胡適は「三論問題と主義」（『每週評論』第36号[1919年8月24日]）、「四論問題と主義」（『每週評論』第37号[1919年8月31日発行]）を書き、特に「四論問題と主義」で「その態度を鮮明にし、その政治態度（つまり馬克思主義に対する態度）を表明した」。

胡適はこの「問題と主義」論争の後、『新青年』第7巻第1号（1919年12月1日発行）に発表した「“新思潮”的意義」の中で「問題を研究し、科学原理を輸入し、国故を整理し、文明を再生しよう」のスローガンを提出し、「問題と主義」論争を踏まえた“国故整理”論を提示した（「第一歩は學術思想の系統を整理することである」「第二歩はそれぞれの學術思想がどのように生まれ、その後どのような影響力を持っていたのかを明らかにすることである」「第三歩は科学的方法を用いて[學術思想に対して]精確な考証をなし、その本来の意味をはっきりさせることである」）。これで胡適の“国故整理”の性格が明確になった。

胡適は更に『努力週報』を創刊し（1922年5月7日、胡適主編）、第2号に「我們的政治主張」を発表し、“好人政府”の成立を鼓吹した。加えて、『努力週報』が増刊『読書雑誌』（1922年9月3日、発行の構想は同年2月22日）を発行して改めて“国故整理”を提唱した。『読書雑誌』の宗旨は引導青年を埋頭読書と国学研究させるであり、『国学季刊』（1923年1月創刊）と相配合して“国故整理”を提唱したという。

これに対し文学研究会では、魯迅の「不周山」執筆直前のことであろう、『文学週報』第51期（1922年10月1日発行）に西諦（鄭振鐸）の「整理中国文学的提議」を、第53期（1922年10月21日発行）に馥泉（汪馥泉、筆名唯明、浙江省出身、日本留学帰り）の「整理中国古代詩歌的意見及其他」を載せるなど、胡適流の“国故整理”派に反論を加えた。ただ文学研究会には“国故整理”そのものに反対する者もあり、『小説月報』第14巻第1号（1923年1月10日発行）に「整理国故と新文学運動」欄を設けて、“国故整理”への賛成論と反対論等を載せた。

創造社でも『創造週報』第28号（1923年11月18日発行）に成仿吾「国学運動的意見（評論）」、第36号（1924年1月13日）に郭沫若「整理国故的評価（評論）」

が載り、前者は“国故整理”そのものに反対し、後者は“科学的国故整理”には賛成するも胡適流の“国故整理”には反対した。

こうした“国故整理”を巡っての論争に対して、「補天」執筆当時、北京大学などで中国小説史について講義し、『古小説鉤沈』や『中国小説史略』の編纂執筆の仕事に従事していた魯迅は、もともと新潮社の“科学的国故整理”の主張には賛成していたものと考えられる。しかし胡適流の“国故整理”には反対の立場をとり、魯迅は、前掲の胡適の“多研究些問題、少談些主義”テーゼに反発し、単なる歴史、文学研究への回帰ではいけないとした。胡適は1920年末と1921年初めに『新青年』同人に手紙を出し、同誌がマルクス主義宣伝の「色彩が鮮明すぎる」と指摘し、「政治を語らず」とする方向への編集方針の転換を提起した。これに対し魯迅もすかさず反論し、“主義”と離れた、“現在”と離れた、“整理”のための“整理”、“研究”のための“研究”、他人に強要する“整理”“研究”に反対した。

魯迅はのちに「未有天才之前」（1924年1月17日、北京師範大学附属中学での講演。魯迅著『墳』所収）でも次のように言っている。

現状について言うと、何をやるかは元々各人の自由です。老先生が国故を整理したいなら、無論南側の窓辺で死んだ書を読まれるのは構いません。

ですが、青年には青年の生きた学問と新しい芸術があるので、各人がおのおのしたいことをしても、まず差し支えありません。でも、この[“国故整理”という]旗を掲げて号令をかけようとするなら、それは、すなわち中国を永遠に世界と隔絶させようとするものに他なりません。もし、皆がこれでなければならぬ、と考えるなら、それはもっと荒唐無稽なことになります。

中島長文氏は、魯迅が“国故整理”に反対した理由を「一つには学者が国故整理をすることには反対ではなかったようである。北京大学の『国学季刊』創刊号の表紙を飾ったのはほかならぬ彼のデザインであった。しかし彼は文章のうえでは一貫してこの国故整理に反対した」、「もう一つは中国人自己相対化が不足していることを衝いたのである。つまり即自的存在でしかない中国人が国故に向かえば必ずそれに足を取られてしまう、伝統の海に溺死することの危惧。[略]中国自身の相対化を強いる扉を常に世界に向かって開いておこうというのが彼の戦略であった。そして同じく新思潮の陣営に属した胡適たちと最も違うのはその場合の自己対象化の深度が隔絶して違う点である」⁹とまとめており、筆者も同感である。

要するに、魯迅は白話文学を中心とした“国故”の整理自体は、別に反対ではなかった。他人、特に青年に強制すること、“現実”や“主義”と関わりをもたせないことに反対したのである。魯迅は歴史小説の執筆によって、胡適の

とは別の“国故整理”、“現在”と関わりがあり、他人に強要しない“科学的国故整理”の在り方を示そうとしたものと考えられる。

エ. 『学衡』派の“国粹保存”に反対する

魯迅が歴史物を執筆したのには、“国粹保存派”たる『学衡』派への反発もあった。

文学革命後の新文学に対して、最も早くこれに異を唱えたのは林紘であり、『国故』月刊を拠点とした劉師培らの“国故派”であった。その後、1922年1月に南京の東南大学で保守国粹(復古)派の月刊『学衡』が創刊される(主編は吳宓。アメリカ留学帰りの梅光迪、吳宓、胡先驕らが執筆)。彼らは「国粹派の保存国粹」の立場から、文学進化論思想と新文化運動に強く反対し、復古主義を宣伝した。“国故整理”に対しては、全ての“国故整理”に反対した。

これに対して新文学の陣営から猛反撃が加えられた。具体的な問題を巡っても、新旧両派の間で激しい論争が繰り広げられた。例えば、1922年8月発行の汪静之の愛情詩集『蕙的風』(上海亜東図書館。1920年～1922年作詩。72首。中国最初の愛情詩集)を巡っての『蕙的風』論争¹⁰がある。『蕙的風』の擁護派としては、胡適、朱自清、劉延陵がそれぞれ序を書いて賞賛し、周作人は書名を題し、魯迅も、前年夏に汪静之に手紙を書いてこれに高い評価を与えていたが、出版後『学衡』派に繋がる守旧派の胡夢華(東南大学学生)等が、汪の愛情詩は「形を変えた淫業の提唱」、「人を墮落させる極めて不道德な詩」であり、作者は「新しい偶像を手にして金をもうけ」「金を巻き上げる若僧」などとして『蕙的風』と作者を激しく攻撃した¹¹。この胡夢華等の批判に対して擁護派の面々も反撃した¹²。

他に、魯迅による『学衡』批判には、1922年2月9日発行『晨報副鐫』掲載の「估『学衡』」(署名鳳声。『熱風』所収。1922年2月発行『学衡』第一期所載の梅光迪「評提倡新文化者」、肖純錦「中国提倡社会主義之商榷」、馬承堃「国学摭譚」、邵祖平「記白鹿洞談虎」、邵祖平「漁丈人行」、胡先驕「浙江植物採集遊記」[連載物]に対して書かれた。該文は「『学衡』派の、必死になって“新文化”を排撃して旧学問を振り回す”ものの、同時に無学無能であるという、保守、虚弱の本質を暴露した)、1922年9月20日作、同日発行の『晨報副鐫』に掲載の「以震其艱深」(魯迅は「こうした“国学”は、難解ではないが悪文であり、正しく“之を一読すれば嘔かんと欲し”、再読すれば必ず嘔くなり、というものだ」と記した)、1922年11月3日「“一是之学説”」(同日発行『晨報副鐫』掲載。後掲の吳宓「新文化運動之反応」への批判。吳文は「新文化に反対し、復古を宣伝し、鴛鴦胡蝶派と同一の傾向を有していた)、1922

年11月9日作「对于批評家的希望」(同日発行『晨报副鐫』)がある。

他に『学衡』の新文化派に対する攻撃文としては、1922年10月10日発行の『中華新報』に載った吳宓の「新文化運動之反応」が新文化に反対して復古を宣揚し、同月22日発行の『中華新報』掲載の「論写実小説之流弊」が鴛鴦胡蝶派、黒幕派と欧州の写実文学を混同して新文学家を批判した。

オ. 鴛鴦胡蝶派に反対する

『学衡』派の他に、“国粹保存に熱心だったのは上海の鴛鴦胡蝶派であった。これにも魯迅は諷刺、批判の文章を書いた。例えば前掲「以震其艱深」(上海の“国学家”鴛鴦胡蝶派を批判。李涵秋の「文字感想」[1922年9月20日発行『小時報』]が新文学家を攻撃したのに対して)、「所謂“国学”」(1922年10月4日発行『晨报副鐫』。「俄かに成り上がった‘国学家’」、即ち“商人、遺老”と租界の鴛鴦胡蝶体小説を作る“文豪”を批判した)、「児歌の“反動”」(1922年10月9日発行『晨报副鐫』。1922年9月に鴛鴦胡蝶派の胡懷琛が鄭振鐸に宛てた手紙の中で新文学運動を攻撃したことに対して)、「不懂的音訳(一)(二)」(11月4日、11月6日作。同日『晨报副鐫』掲載。上海の自称“国学家”たる鴛鴦胡蝶派批判。「これら“国学家”たちの、復古、守旧、排外を堅持し、新文学運動に反対するという本質を暴露した」)など。

カ. 神仙思想を批判する

魯迅は当時もなお人々の心に生きている、不老不死を求める神仙思想を批判した。「不周山」執筆当時は、何故か特に神仙思想を取り上げて批判諷刺してはいないが、その3年前の1919年の「随感録四十九」、「随感録五十七 現在の屠殺者」、「随感録五十九 “聖武”」等で神仙思想を科学を否定する迷信として批判している。無論「不周山」執筆当時も神仙思想への批判的態度は変わっていない筈である。

キ. 郭沫若の詩集『女神』との出会い

恐らく題材の上で「不周山」執筆に最も影響のあったのは、郭沫若の最初の詩集『女神』、特に第一篇「女神之再生」(「女神の再生」と言ってよいだろう)。

「女神之再生」は1921年2月25日発行上海『民鐸』第2巻第5号に発表された。『女神(じよしん 劇曲詩歌集)』(1921年8月5日初版。上海泰東図書局。創造社叢書

第一種)所収。そして1年後の、1922年8月5日に、郁達夫の肝いりで“『女神』紀年会”が開かれ、兼ねて同年3月以来の文学研究会と創造社との対立の解消を図るべく文学研究会の対立相手、沈雁冰、鄭振鐸も招いた(しかし結局対立は解消するには至らなかった)。

「不周山」執筆以前の魯迅、周作人兄弟と創造社との関係は、郁達夫に限って言えば、この年の2月前後に湧き起こった『沈淪』(1921年10月。上海泰東書局)批判の声の中での周作人の『沈淪』に対する高い評価と郁達夫の周作人への感謝の気持ちなどから推察できるものの、兄弟の郭沫若文学についての評価はよく分からない。思考するに、彼らは郭沫若の主張は理解できるが、その作品群は一種のスローガン文学であり、文学作品としての完成度は余り高くない、つまり余り評価できない、と考えていたようである。

龔濟民、方仁年著『郭沫若年譜』(1982年。天津人民出版社)によると、「女神之再生」は、中国の古代神話“共工、怒りて不周山に触れ”、“女媧、天を補う”物語に取材して、顛頊と共工の肉体に当時の反動軍閥の靈魂を注ぎ込んでおり、“当時の中国の南北戦争を象徴している。共工は南方を象徴し、顛頊は北方を象徴し”、“この両者の外に第三の中国——美^{うつく}しの中国を建設しようと考えた”(郭沫若著『創造十年』)。この「女神之再生」は、女神(女媧)の再生(“新生の太陽の出現”、“光明の中国”の到来)への希望と“烏煙瘴気の黑暗世界”の消滅への願いを屈託無く高らかに詠い上げたものである。

元々歴史物としては玄宗と楊貴妃についての話に関心を抱いていた魯迅ではあったが、この「女神之再生」との出会い(再会?)によって、女媧から清末の紹興出身の女流革命家秋瑾、秋瑾から多数の民族革命家、更には辛亥革命の成功、中華民国の成立、革命の挫折へと連想が広がっていき、その過程で「女神之再生」に於ける女媧等の描かれ方、特に女媧の描かれ方に不満を覚えたのであろう。この魯迅が感じた不満は、そのまま「不周山」の女媧が作品の冒頭で感ずる、あの「ただただ、何かが足りないような、同時に何かが余っているような、歯痒い気分だった」「つまらない」(原文「只是很懊惱、覺得有什麼不足、又覺得有什麼太多了」、「無聊」)に繋がっている。

いずれにせよ魯迅は、郭沫若の「女神之再生」によって女媧を主人公とした歴史小説の創作欲を大いに刺激されたことは確かであろう。

ク. フロイト精神分析学との出会い

筆者は中国におけるフロイト精神分析学の紹介・受容の歴史については調査不足のためよく分からない。また魯迅のフロイト精神分析学との最初の出会いについても不明である。

ところで実は、興味深いことに日本の九州帝国大学で医学を学んでいた(1923年3月卒業)郭沫若が、フロイト精神分析学がことのほか気に入っていたようであり、例えばフロイト精神分析学を使って『西廂記』を分析し(1921年5月2日作「西廂芸術上之批判与作者之性格」。同年9月上海新文芸書社版『西廂』初収)、「この『西廂記』も‘リビドー’(Libido)が産んだと言える——所謂‘リビドー’は精神の外傷(Psychische trauma)であり、個体の性欲が其の人の道徳性或いは其の他の外界の關係に抑圧されて生じた無形の傷害である」と述べている。魯迅は、この郭沫若の『西廂記』論を読んでいた可能性がある。郭沫若は『創造』季刊第2巻第1期(1923年5月上旬)にも「批評与夢」(帰国直前の1923年3月3日作)を載せ、やや詳しくフロイト精神分析学を紹介しつつ、自作の短編小説「残春」(1922年4月1日作)を解剖の俎上に載せている。

ただ魯迅が「不周山」においてフロイト精神分析学を利用した真の用意が、これまた分からない。どうやら全面的にフロイト精神分析学を信じて利用したというより、疑問を持ちながらも、別に用意があつて利用したように思う(この点については本論(後)で触れることにする)。

その後、魯迅が厨川白村の『苦悶の象徴』(1925年魯迅翻訳本の出版)との出会いにより、文芸は“苦悶の象徴”であると信じるようになってフロイト精神分析学から離れ、明確に批判の立場を取るようになったことはよく知られる。

ケ. 北京大学生の講義費不納入闘争

1922年10月18日に北京大学の一部の学生が、大学の講義費を徴収しようとする方針に反対し、紛争が発生した。蔡元培学長らが責任を取って辞職すると、大部分の学生は代表を推挙して引き留め、紛争反対の意志を表示した。同月25日に蔡元培等は復職し、紛争は収まった。結局大学側が譲歩して講義費を取り消し、学生馮省三だけが除籍処分となる。だが実際は馮省三は紛争発生後に参加したのであり、決して中心人物の一人ではなかった。魯迅は「即小見大」(11月18日。当日の『晨报副刊』掲載)を書いてこの学生紛争を紹介し、「学生たちは勝利したが、誰かが、あの今回犠牲となった者[馮省三]のために“祝福”[幸福を祈る意。本来は、旧暦の大晦日に福神を迎えて来る年の幸福を祈る民俗行事]したとは聞いていない」と嘆くとともに、この紛争から「小から大を見る、と言うが、かくて私は久しく解けなかった或る事柄を、ついに悟ることができた。それは、三貝子花園に良弼と袁世凱の暗殺を企んで死んだ四烈士の墳があるが、その三つの墓碑には、なぜ民国十一年[1922]になっても、まだ一字の文字を刻む者すら現われないのか、ということである。全ての犠牲が祭壇の前に血を溜いだあとに人々に残すのは、実は、ただ“散胙”[犠牲の肉の分配]とい

うことだけなのである」と記した。この北京大学の学生風潮についての魯迅の思いは、明らかに「不周山」に投影されているものと見られる。

コ. 10月革命節紀年会

1922年11月7日に「北京各進歩団体」が北京大学三院で連合して“10月革命節紀年会”を挙行政した(李大釗が大会主席)。正に魯迅が「不周山」を執筆中のことであろう。『魯迅日記』には特にこのロシアの10月革命の“紀年会”についての言及はないが、その開催の報に接し、自国中国の辛亥革命の意義を改めて問い直す中で、革命に命を捧げた多くの志士、特に紹興出身の徐錫麟、秋瑾のことが脳裏に浮かんだことだろう。たぶんこの“革命節紀年会”も、魯迅の「不周山」執筆を一層促したに違いない。

(待 続)

※ 本稿は『[中国]紹興文理学院学報』(2001.3)に掲載した拙論「『不周山』試論(上)——魯迅『故事新編』世界之一」(中国語)の日本語訳を補訂したものである。

拙論の冒頭に編集者による「摘要」が掲げられている(「本文は“魯迅の歴史小説集『故事新編』に関する総合研究——もう一つの‘国故整理’”の第一篇である。文章は、先ず魯迅が以前から思いを巡らし、彼に『不周山』の執筆を促した幾つかの要因について論述を展開し、適切に推測を加えた。ついで作品内容について分析を加え、幾つかの疑問について検討を加えた」[原文は「該文為“魯迅歴史小説集『故事新編』総合研究——別一種‘国故整理’”之第一篇。文章首先就魯迅已考慮到的、促成他写作『不周山』的幾個主要原因展開論 述、適當加入一些推測。其次是对作品内容進行分析、对若干疑問作了探討」])。

また「摘要」に続いて「關鍵詞」(「キーワード」)が掲げられており(「『不周山』」、「『故事新編』」、「魯迅」、「歴史小説」)、本論の冒頭にキーワードを掲げるに当たって参考にした。

なお「『不周山』試論(下)——魯迅『故事新編』世界之一」(中国語)は目下執筆中である(『[中国]紹興文理学院学報』に掲載予定)。

注

¹ 竹内好著『魯迅』(1994年、日本評論社)。

² 『晨报四周紀念増刊』[1922年12月1日]所載。北京新潮社版『呐喊』(1923年8月)所収。

第13刷次印刷時[1930年1月第二版]で削除。『故事新編』所収時に改名(1936年1月。上海文化生活出版社、『文学叢刊』の一)。

³ 学習研究社『魯迅全集』第3巻[1985年11月]『野草・朝花夕拾・故事新編』中の『故事新編』解説。

⁴ 「寂寞」の中にいるのは、一見すると「こうした戦士たち」であるようだが、筆者は「寂寞」の中にいるのは「私」であると考え。なぜなら、「こうした戦士たち」に自分と同様に「寂寞」を感じることがないようにと考えたからこそ、「私」は「少しばかり大声を挙げて加勢してあげよう」と思い立ったのだから。逆説構文(「雖……、也……」)になっている以上、ここは「私」は「寂寞」の中にいて変革実現の希望を抱いておらず、ために声高に変革を訴えることはしないが、変革を訴える人々を励ますことはできる、と捉えられないと、意味が通らない。「寂寞」の中にいる主語が「私」であることを示そうとして、作者はその直前に「思うに」(原文「我想」)を無理やり挿入したのであろう。

⁵ 許寿裳著『亡友魯迅印象記』(1953年。人民文学出版社)所収「雑談著作」、竹村則之「魯迅の未刊腹稿『楊貴妃』について——時間旅行の幻滅——」(中文研究会『未名』第19号[2001.3]所収)等を参照のこと。なお1923年『現代日本小説集』の「附録 關於作者的説明」では、引用文中の張獻忠と楊貴妃の部分はカットされている。魯迅の西安行については単演義著『魯迅在西安』(1981年。陝西人民文学出版社)が詳しい。

⁶ この日本語訳は、田中純「文壇新人論」(『新潮』1919年1月号掲載)からの引用。学習研究社『魯迅全集』第12巻所収『訳文序跋集』中の『現代日本小説集』附録「作者に関する説明」訳注(二九)参照。

⁷ 本注6に同じ。

⁸ 西諦「発端」、鄭振鐸「新文学之建設と国故之新研究」、顧頡剛「我們对于国故应采取的態度」、王伯祥「国故的地位」、余祥森「整理国故与新文学運動」、嚴既澄「韻文及詩歌之整理」、玄味(茅盾)「心理上的障碍」等。

⁹ 中島長文「解説:『悲涼』の書——『中国小説史略』」(中島長文訳注『中国小説史略』[1997年。平凡社]所収)。

なお故伊藤虎丸氏は、その『魯迅と日本人 アジアの近代と「個」の思想』(1983年。朝日新聞社『朝日選書』228)で、墨子を描いた「非攻」と禹を描いた「理水」の2篇のみを、「より積極的に、『国粹』を人民の側に取り戻そうとする動機が現れて来ているという」意味で魯迅が『中国人失掉自信力了嗎』(1934年9月)で言うところの「中国の背梁骨」を描こうとした作品であるとみなし、「これは胡適などが提唱していた『国故整理』(古典の再評価)とは流れを異にするもう一つの伝統文化の再評価、再発見の仕事だったともいえるのである」としている(IV「魯迅の小説とその人間像」中の「『中国の背骨』を描こうとした『非攻』『理水』」)。氏は魯迅が実践した彼流の“国故整理”を狭い意味で捉えており、筆者には賛同できかねる。

¹⁰ 『蕙的風』論争については前掲劉炎生『中国現代文学論争史』等による。

¹¹ 胡夢華「説了『蕙的風』以後」(1922年10月24日発行『時事新報』所収『学灯』)。胡夢華「悲哀的青年」(1922年11月3日発行『民国日報』所収『觉悟』)。陳校方「杖着新偶像賺錢的著作家」(1922年11月5日発行『時事新報』所収『学灯』)。胡夢華「説了『蕙的風』以後」の弁護(1922年11月18日、19日発行『時事新報』所収『学灯』)。

¹² 章鴻熙「『蕙的風』与道德問題」(1922年10月30日発行『民国日報』)。周作人「什么是不道德的文学」(1922年11月1日発行『晨報副鐫』)。魯迅「对于批評家的希望」(1922年11月9日発行『晨報副鐫』)。魯迅「反对“含淚”的批評家」(1922年11月17日作。当日発行の『晨報副鐫』登載。「对胡夢華批評『蕙的風』和答复章鴻熙的話作了抨擊」)。周作人「情詩」(1923年発行『自己的園地』[北新書局]所収)。

(信州大学 全学教育機構 教授)

2007年4月3日 採録決定

松岡 俊裕

本論は、魯迅の歴史小説集『故事新編』の第一篇「不周山」(のち「補天」と改題)に関して論じた中国語論文の日本語訳を補訂したものであり、筆者の“魯迅の歴史小説集『故事新編』に関する総合的研究——もう一つの「国故整理」——”の第一篇である。魯迅が「不周山」の執筆に着手した経緯については、作者自身の説明はあるものの必ずしも読み手にその発言の意図が明確に伝わってこず、従来不明とされてきた。筆者は本論(前)に於て「不周山」の執筆意図を含む執筆経緯について各種資料に基づいて独自の解釈を提示した。詳細は以下の通り。

○かつて中国国民の劣悪な国民性の改造を目指して史実に比較的忠実な歴史小説「スバルタの魂」を書いた魯迅であったが、文学革命後は、菊池寛や芥川龍之介の影響で史実に自由に潤色を加えた“歴史的小説”に傾倒して何篇か訳出した。ただ森鷗外の歴史物は、その晩年の「渋江抽斎」等の史談物に不満を覚えたからなのだろうか、全く訳していない。魯迅は特に菊池の「三浦右衛門の最後」に感心し、その理由を「この小説が日本の武士道精神[の本質]を暴露し諷刺している」からであるとし「中国に封建“名教”[儒教道徳のこと]を糾弾する作品がまだ欠けているのを慨嘆した」。そして魯迅は現に三浦右衛門と同様な目に遭った楊貴妃の死をテーマにした戯曲もしくは小説の執筆構想を持っていた。○当時文学研究会同人の茅盾は周作人に手紙を出し、その兄の魯迅に該研究会の機関誌的存在たる『小説月報』のために小説の寄稿を依頼した。前述したように歴史物の執筆については、すでに考えていたと思われる魯迅は、茅盾からの依頼を契機に小説の執筆に真剣に取り組むことになった。先ず現代物に手を染めるも出来は芳しくなく、次第に歴史物に関心が向くようになる。○魯迅の歴史小説への関心の背景には、以下に記す如く、胡適流の“国故(国の文化芸術)整理”への反発、“国粹保存派”たる『学衡』派と鴛鴦胡蝶派への批判があった。魯迅は胡適らの唱える白話文学を中心とした“国故”の整理自体は別に反対ではなく、他人、特に青年に強制すること、“現実”や“主義”と関わりを持たせないことに反対した。魯迅は歴史小説の執筆によって、胡適らとは別の“国故整理”、“現在”と関わりがあり、他人に強要しない“科学的国故整理”の在り方を示そうとした。魯迅が歴史物を執筆したのには、文学革命後の新文学に異を唱え、復古主義を標榜して全ての“国故整理”に反対していた“国粹保存派”

たる『学衡』派への反発もあった。『学衡』派の他に“国粹保存”に熱心だったのは上海の鴛鴦胡蝶派であった。これにも魯迅は諷刺、批判の文章を書いている。○魯迅は「不周山」に於て、当時のお人々の心に生きている、「不老不死」を求める神仙思想を批判した。「不周山」執筆時は、「不周山」以外にとりたてて神仙思想を批判諷刺していないが、その3年前には科学を否定する迷信として神仙思想を痛烈に批判している。○魯迅の属する人生のための文芸を標榜する文学研究会に対抗して芸術至上主義を主張する創造社を結成した郭沫若の女神、女媧の復活を取り上げた新詩「女神の再生」(詩集『女神』の冒頭作)の出来映えへの不満が、本篇執筆の直接の契機になった。そもそも魯迅は女媧の復活はいまだしと考えていたし、「女神の再生」はただ「光明」や「再生」を唱えるだけであり、魯迅はこうしたスローガン文学的な作品に我慢できなかった。○日本の九州帝国大学で医学を学んでいた郭沫若は、フロイト精神分析学がこの頃のほかに気に入っていたようであり、例えばフロイト精神分析学を使って『西廂記』を分析している。この郭沫若の『西廂記』論を読んでいたと見られる魯迅は「不周山」においてフロイト精神分析学を利用したと回想しているが、フロイト精神分析学を信じて利用したというより、フロイト精神分析学に疑問を持ちつつ別に用意があつて利用した(フロイト好きの郭沫若に対する痛烈な諷刺。この点については本論(下)で詳しく触れる予定)。○当時北京大学で発生した講義費の徴収に反対する学生運動は、学長等の辞職、大多数の学生の運動に対する反対の意思表示、学長等の復職を経て、止んだ。大学当局は譲歩して講義費徴収を取り消すも、ただ学生の馮省三だけが、風潮発生後に参加したにすぎず決して中心人物ではなかったにも拘わらず、除籍処分となる。学生たちは勝利したものの、“犠牲者”馮省三の無事を祈る者は皆無であった。魯迅は「即小見大」を書いて学生運動を紹介し、この“犠牲者”馮省三の無事を祈る者は皆無であった事(「小」)から長い間理解できなかった事(「大」)、つまりさる花園にある袁世凱等の暗殺を計画して処刑された「四烈士」の墓のうち三つの墓の墓碑に未だに一字も刻する者が現われない、つまり彼らの死を記念する者が現われないことの原因を悟ったとした。この北京大学の学生運動に纏わる魯迅の思いは、明らかに「不周山」に投影されている。○これも正に魯迅が「不周山」を執筆中のことであろう、北京各進歩団体が北京大学で連合してロシア“10月革命節紀年会”を挙行了した。その開催の報に接して自国中国の辛亥革命の意義を改めて問い直していた魯迅の脳裏に、革命に命を捧げた多くの志士、特に紹興出身の徐錫麟、秋瑾のことが浮かんだに違いない。たぶんこの“10月革命節紀年会”も、魯迅の「不周山」執筆を一層促した筈である。○以上全体として、本作が清末に密告によって処刑された紹興出身の女流革命家秋瑾を始めとする改革や革命に殉じた人々の奮闘と死を、女媧の奮闘と死を描くことで記念したものであることを示唆した。